

# 「巻頭言」がおもしろい

人間学研究所所長 小林 康正

現在、人間学研究所の20周年事業の準備として記録の作成に携わっている。仕事の中身は、これまで当研究所がどのような共同研究やイベント、企画を行ってきたかを振り返るいわば「修史」の作業である。歴代所長へのインタビューを含め、イベント関連の資料の閲覧など、いくつかの作業があるが、その中心になるのが紀要を読むことである。そう、この『人間学研究』を読むことである。

掲載された論文やシンポジウムの記録などは、当たり前ながら、それ自体真摯で、気迫溢れた取り組みの連続で、正直気おされて肩が凝ることも多い。また場を同じくしないと、理解するのに苦慮することもあるので、簡単に読み飛ばすわけにもいかない。なかなか骨が折れるわけだ。

そんな作業の中で、そこに居合わせた人々の人柄や性格を伝えてくれるのが編集後記やコラムなどである。こうしたものに目を通すと、ほっとする。そんな苦労があったのね、今私がやっていますよ。そんな感じである。

だが、そんな中でも巻頭言が断然おもしろい。

どういうわけか紀要の巻頭言は、所長が書くことになっている。学術誌に「巻頭言」というのは不思議ではあるが、やはりそこは人間学研究所という独立した研究所の性質に拠るものか。ただ、いったい誰が？ どんな理由で読むのか？ はなはだ疑問がないわけではない。もしかしたら、独言かもしれない。

そんな軽い違和感を覚えながら読むのだが、研究所の歴史を回顧するには大きな手掛かりとなる。人間学研究所の活動は（よくもわるくも）所長の差配が大きいからだ。この所長の時にはこんなイベントがあった。あの人の時の所長室

はこんな雰囲気だった、という具合だ。

しかし、功利的な目的だけで読んでいるわけではない。読み返してみると実におもしろいのである。モノによっては読み直し、玩味玩読してしまう。そこに書かれていることは区々で、しっかり当時の取り組みを紹介してくれている「記録」もあれば、「所信表明」や「学問論」や折々の関心事などがある。

もちろん文章そのものに魅力があるのだが、歴代所長の顔を思い浮かべるとさう面白いのである。失礼ながら、「なるほど、らしいな」と思われるのだ。

ちょっとせりふを抜き書きしてみよう。

「専門教育を行う必要度が低下した教員から膨大な研究時間を剥奪してもまったく問題ない。」「自由すぎる巻頭言を書き得たこと、感謝する。」「自慢ではありませんが、私の研究はまったく役に立ちそうもありません。」「研究所の諸活動は、よい読者と熱心な聴衆にめぐまれることが不可欠です。」「所長に就任しましたが、言うまでもなく先の御二人の所長先生に比べるとそのリーダーシップ能力の見劣りするものであることは衆目の一致するところであります。」

どうです。読みたくなりませんか。本学に長年奉職している諸氏であれば、どれが誰の発言か想像できるのではあるまいか。全文に目を通せばわかるように、謙譲謙遜のなせる業ではない。これらは本気（まじ）の発言である。まさに「文は人なり」を感じさせる。そんな「人間」味のある人間学所長の巻頭言も『人間学研究』の歴史の一部である。

などと、書いているうちに、ちょっと怖くなった。引用ででっあげた文章から私を見透かされてしまうのではないかと。